『雪踏みの音を聴く』

標点

子どもたちの幸せと、教師のやりがいをふくらませる学校運営をめざして

県小学校長会会長（岡山市立福島小学校長）

竹本俊哉

ここ数年で、学習指導要領の完全実施や小学校での35人学級・教科担任制の導入、ＧＩＧＡスクール構想の推進など、教育現場を取り巻く環境が大きく変化している。さらに、働き方改革の一層の推進が求められている。そのような中、各校では、未来社会の担い手となる児童の育成に向けて、「チーム学校」で一丸となって取組を進めている。しかし、多様で急激な変化の全てを首尾よく学校運営に取り入れることが難しく、戸惑う状況も少なからずある。

その中の一つに、「勤務時間」と仕事の「やりがい」との両立に向けたバランスのとり方がある。

これまでも、子どもと向き合う時間の確保と充実のため、行事や会議の見直し等の工夫や校務支援システムの導入、教員業務支援員の配置などの支援もいただきながら負担の軽減を図ってきた。徐々に成果が見られてきてはいるが、子どもの成長を実感した時に感じる充実感、授業づくりや学級経営、自分の今の思いや迷いを話し合える充足した時間などから得られる「やりがい」は増えてきたであろうか。在校時間の縮小とのバランスはとても難しい。今後も工夫や努力を継続していくが、次期学習指導要領の改訂での各教科の指導内容や指導時数の削減にも期待がかかる。

さて、今年度の岡山県小学校長教育研究大会で、前国立教育政策研究所長、浅田和伸先生の「学校は子どもたちの幸せのためにある」という講演をお聞きした。「何のための学校か」という問いに、「様々に課題が移り変わる中でも持ち続けなければならないのは、『教育は子どもたちの幸せな生のため』という不動の視点だと私は思う。『生きる力』も『主体的・対話的で深い学び』も『社会に開かれた教育課程』も、またおよそどんな言葉で言われても、すべての学校教育、学校運営はそのためにある」と話され、心から共感し、子どもたちの顔が目に浮かんだ。

今日も2年生が、校長室の「九九道場」にやってくる。緊張気味に部屋に入り、九九を言い終えた瞬間に、満面の笑みがこぼれる。子どもたちの幸せな生のために、しっかりバランス感覚を磨いていきたい。